

## 三育学院カレッジ卒業式 式辞

卒業生の皆様、そしてインターネットでご覧下さっているご家族、保護者、そしてご友人、関係者の皆様、本日はおめでとうございます。今回の式は、新型コロナウイルスの感染が拡大し緊急事態宣言下で行われております。そのため、様々な制約を受けることになりました。保護者の皆様に卒業式にご参加いただきたいと願っておりました。しかし、わたしたちは日本の社会と共に、そして世界と力を合わせてこの事態に立ち向かわなければなりません。皆様の御理解をお願いいたします。

卒業式は、三育学院として、通常カレッジ神学科と大学で共に行って参りました。今回大学は、感染のリスクを考え国家試験の翌日に天沼教会のご協力をいただき2月15日に実施致しました。本日は、福音を伝える伝道者として派遣される神学生の卒業式であり、彼らがその使命を果たすために共に祈るそのような式であります。

さて、卒業生の皆様は専攻したコースは異なりますが、5名に共通するのは、聖書を学んだことです。そして、卒業後の役割や働き方は異なりますが、み言葉を宣べ伝えるために、派遣されるという共通の使命を与えられています。

テモテへの手紙二 4 章の 2 節をお読み致します。式次第と共に聖句をお渡ししております。

「御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい。とがめ、戒め、励ましなさい。忍耐強く、十分に教えるのです。」

この言葉は、晩年のパウロが若き伝道者テモテに書いた手紙の一節です。本日の聖句の前の 4 章 1 節には、次のように書かれています。「 神の御前で、そして、生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト・イエスの御前で、その出現とその御国とを思いつつ、厳かに命じます。」

パウロが、キリストの再臨を強く意識しているのがよく分かります。パウロも、テモテも私たちと同じように再臨を待ち望みそれを伝えるアドベンチストでありました。

卒業生のみなさんは、家族、友人、そして多くの人達の言葉によって励まされ、教えられ、学び今があります。卒業生だけではなく、わたしたちひとりひとりがそのような経験をしてきました。振り返れば厳しい言葉も感謝です。思いやりや愛から発せられる言葉によってわたしたちは、生かされてきました。

パウロは、テモテに「御言葉を宣べ伝えなさい」と手紙に書きました。

わたしは、牧師の仕事をしていたときに、大切な家族を失った人に何と声をかけてよいかとまどいました。かけるべき言葉を見つけることが出来ず悩みました。しかし、たどり着いたのは、共にご家族と御言葉を読みそして祈ることでした。大きな不安をかかえ困惑する人には、平和を語りかける言葉を聖書に見つけることができました。孤独に悩む人には、共にいると言うイエス・キリストの言葉を紹介することが出来ました。

聖書は、どんな深い悲しみにも、不安にも、恐れにも、孤独にも語りかけることができるのです。なぜなら、誰よりも深い悲しみ、苦しみを経験されたイエス・キリストの言葉だからです。

言葉は、それを語られた存在と切り離すことが出来ません。聖書の言葉は、愛と、恵みに満ちたキリストの言葉、神の言葉です。全ての人が必要としている愛と恵みに満ちた言葉です。

卒業生の皆様は、その御言葉を宣べ伝える、愛と恵みの言葉を語る使命を託されています。神の言葉が、人々を支え、慰め、希望を与えるのを目の当たりにするすばらしい経験に招かれているのです。

「折が良くても悪くても励みなさい。」とあります。「折り」と言う言葉は、「時」とも訳される言葉です。卒業生の何人かは聖書の原語であるギリシャ語を学びました。カイロスという言葉を学んだと思います。この箇所では、カイロスに肯定また否定を表す言葉を前につけて良いカイロス、悪いカイロスと表現されています。カイロスは、漫然と流れる時ではなく、何かが起きるタイミング、そして出合いや機会を表します。

「折が良くても悪くても」とはどのように考えたら良いのでしょうか。

どのような時にも聖書を語る姿勢です。しかし、相手の気持ちにかまわず、強引に、無理矢理にかたることではありません。わたしたちには、カイロスが見極められないからです。そもそも、わたしちにとって、良い機会、あるいは好ましいとは言えない状況がかならずしもその通りであるとは限らないのです。人間から見て、その現象を良いカイロス、悪いカイロスと不確かに判断しているのですが、それは不確かです。伝道者の判断は、絶対的ではありません。歴史を導かれる神は、人間から見て良い悪いを越え、良き機会となすことが出来るのです。歴史を導かれる神の可能性の前に、伝道者は謙虚でなければなりません。このような例は、聖書に数多く描かれています。

使徒言行録にフィリポというキリストの弟子の話が書かれています。かれは、「淋しい道」へ行くと主の使いから指示を受けます。「寂しい道」、人のいないところは、人の目から見れば、良い場所、機会とは言えません。言わば「悪いカイロス」であります。ところがそこにエチオピアの高官が馬車に乗って通りかかりました。彼は、聖書のイザヤ書を、声を出して読んでいました。フィリポは、馬車と並行して走り、その意味がわかりますかと問いかけます。エチオピアの高官は、「手引きをしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう。」と答えます。まさに、今、ここにフィリポが必要とされていたのです。神のカイロス、神が良い折、良い機会としてくださったのです。フィリポは、イザヤ書からイエス・キリストの十字架を語り、このエチオピアの高官はバプテスマ（洗礼）を受けました。

ですから、わたしたちの目から見て、あるいは経験から、カイロスが悪いと判断せず、折が良くても、悪くても御言葉を宣べ伝えるのです。「励みなさい」というのは、準備が出来ている。すぐにでも対応する用意ができている姿勢を表しています。わたしたちが、可能性を限定してしまうのではなく、神にある可能性を信じるように招かれているのです。

今、アメリカではアジア人に対するヘイト・クライムが問題になっています。トランプ前大統領が、新型コロナウイルスを中国が発生源だと主張し、「チャイナウイルス」と呼び、人々の不満や怒りがアジア人に向けられ、高齢者が突き飛ばされるなど

する事件が多発しています。亡くなった人もいます。

この世界は問題に満ちています。憎しみや、差別、不満、孤独、恐れが世界中に蔓延しています。本日の聖句には「とがめ、戒め」とあります。しかし、それは憎しみを生むような言動ではなく、「励ましなさい」と書かれているように、厳しい言葉であっても、励ます目的で御言葉は語られるのです。

パウロは、テモテニ4章の5節で、テモテを「福音宣教者」と読んでいます。忍耐強く十分に御言葉を教える役割が伝道者には求められています。忍耐はがまんではありません。目の前の現実のあなたに希望を見てそれを待ち望む態度です。そのキリストにある希望があるからこそわたしたちは、たとえ悪いカイロスであるように思われても、神にある可能性を信じるのです。アドベンチストの伝道者として、歴史を導かれる神を待ち望み、全てにおいて忍耐強く福音を教え語り続けるのです。

卒業生の皆さん、みなさんは、神学科で聖書を専門的に学びました。多くの時間を費やし実習などで経験を積みました。知識もまた語る技術、教える技術も必要です。しかし、何よりも大切なのは、神の愛から発せられた神の言葉に希望があるということです。わたしたちが自分の経験や知識から見えるカイロスではなく、神のカイロスを信じて働くように招かれているのです。

この世界は、言葉を必要としています。信仰と希望と愛から発せられる言葉を人々は求めています。

「御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい。とがめ、戒め、励ましなさい。忍耐強く、十分に教えるのです。」

福音宣教者として派遣される皆様の上に神様の祝福を心よりお祈り致します。

2021年3月7日

三育学院カレッジ

校長 東出克己